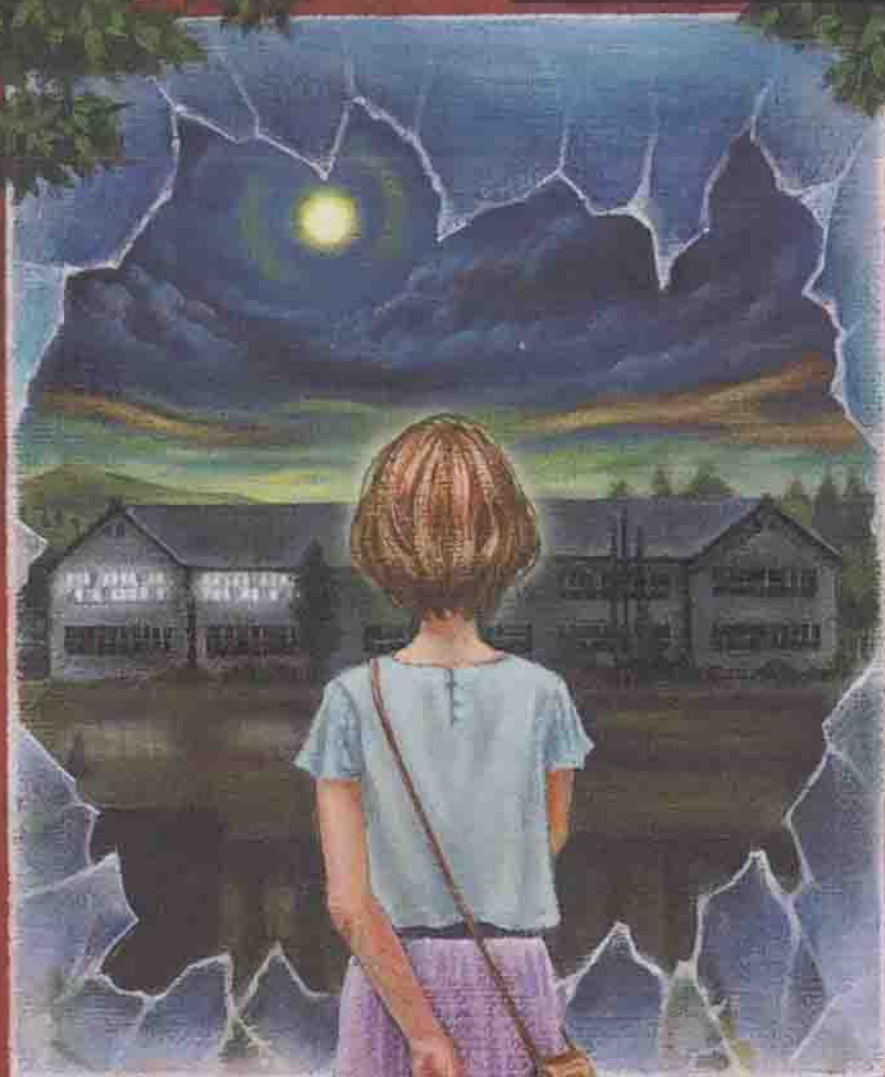


クラスルーム

Class-
room

折原一

Orihara
Ichi



講談





講談社文庫

常州大学図書館
蔵ラズカー章

折原 一

講談社

|著者| 折原 一 埼玉県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。編集者を経て1988年に『五つの棺』でデビュー。1995年『沈黙の教室』で日本推理作家協会賞（長編部門）を受賞。叙述トリックを駆使した本格ミステリーには定評がある。『倒錯のロンド』『倒錯の死角』『倒錯の帰結』など「倒錯」シリーズのほか『叔母殺人事件』『叔父殺人事件』『模倣密室』『被告A』『黙の部屋』『冤罪者』『逃亡者』『赤い森』『タイムカプセル』『帝王、死すべし』『グランドマンション』など著書多数。

クラスルーム

おりはら いち
折原 一

© Ichi Orihara 2013



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2013年8月9日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——大日本印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277623-3

目次

プロローグ 7

第一部 通知 16

幕間 275

第二部 クラス会 279

エピローグ 379

あとがき 390

解説 増山明子 394



講談社文庫

クラスルーム

折原 一

講談社

目次

プロローグ 7

第一部 通知 16

幕間 275

第二部 クラス会 279

エピローグ 379

あとがき 390

解説 増山明子 394

クラスルーム

プロローグ

1

その人物はドアを閉めると、廊下に出た。省エネのためか、廊下の蛍光灯が一つおきに消されている。昼間なのに薄暗く、空気はひんやりしていた。光の及んでいないところに小さな闇^{やみ}があり、そこには病原菌が集結し、獲物が通りかかるのを虎視眈々^{こしたんたん}と狙^{ねら}っているような気がした。

午後二時、食べ終えた膳^{ぜん}の載ったカートが片づけられ、病院では束^{つか}の間訪れる静寂のひとときだった。見舞いの受付開始の三時までまだ間があるが、その人物はそうした時間帯に病院を訪れたのだ。二階のナースステーションに若い看護師が一人退屈そうにしていたが、時間外の訪問者を見ても注意することはなかった。

患者の部屋は212号室だ。ドアは開放されていたので、そのまま入ってみると、六人部屋だった。病状は大したことがないのだろう。六つのベッドのうち二つは空で、残りの四つはカーテンで仕切られていた。

「こんにちは」と声をかけたが応答がないので、静かにカーテンに手をかけて中をのぞいてみた。患者はまるで死んでいるように目を閉じていた。まさかと思いつながら見ていると、胸のあたりがかすかに上下している。昼寝か。この時間帯だったら、仕方がない。また別の時に訪ねよう。見舞いすることは彼女に告げていなかったの、このまま帰ってもかまわないだろう。たまたま久喜市^{くきし}に来る用事があり、駅前の病院を見て、ふと思い立って来たのだ。見舞い用の花も何も持ってきていなかったし、ついでに訪ねたと言ったら患者は快く思わないだろう。

そのまま部屋を出て、迷路のような通路を歩いているうちに別棟のほうに入ってしまった。道順を示すものがないので、困ったなと思っている時、ある病室のネームプレートが目に入り、思わず足を止めた。患者名に見覚えがあったのだ。

ビュンと空気を切る音がして、思わず目を閉じた。過去のおぞましい記憶が、その人物の脳裏を駆けめぐった。

まさか。たまたま同姓同名なのだろう。

その時、通りすぎればよかったのだ。通りすぎていれば……。

ジージージーと低い振動の機械音がした。それが気になって、そのドアを開けてみた。人違いだったら、「すみません」と一言謝り、そのまま出てくればいいのだから。そこは個室だった。壁際にベッドが一つ。そこに二十代半ばくらいの若者が横たわっており、その母親くらいの年配の女が彼の顎に電気シェーバーをあてていたのだ。ドアの開く気配に女がふり返る。

「あら、どちらさま？」

「失礼ですが」

名乗る前に、質問をしておきたかった。「お母さまですか。もしかして、彼、栗橋北中にいませんでしたか？」

「え、ええ、そうだけど……」

女は怪訝そうに首を傾げながら、シェーバーの電源を切った。「あなた、この子のお友だち？」

「ええ、まあ、そんな感じですけど」

あいまいに言葉を濁した。

「あら、そう。ありがとう。誰も訪ねてきてくれなかったのよ」

母親は若者の耳に口を近づけた。「お友だちが来てくださったのよ。ねえ、聞こえてる？」

応答はまるでなかった。

「かなりお悪いんですか？」

失礼を承知で聞いた。

「十年前から、ずっと……」

母親は寂しげに顔を上げ、窓のほうを望んだ。うつろな目で過去を透視するように。

「十年前から？　もしかして……」

「ある日、夜遅く帰ってきて……」

母親は視線を訪問者にもどし、悲しげに溜息ためいきをついた。「それから、ずっと意識がもどらないの。体だけが成長していくなんて、親として悲しくて」

彼女は鼻をすすりあげ、それから泣き笑いのような顔をした。

「白雪姫みたいに、王子様がキスしてくれて生き返ったらいいのに」

母親は「ばかね」と照れくさそうに笑うと、「お茶を入れますから、ちよつと待っててくださいね」と言つて、病室を出ていった。給湯室に行つたのかもしれない。

訪問者は、静かに横たわっている若者を見た。十年前の面影は残っていた。当時のように色白のままだったが、顎と口のまわりの髭が青々としている。精悍せいかんというより、ひ弱な感じがした。

あの時からずつとこのままにいるなんて。体だけが成長するとは、運命のなんと残酷なことか。

「王子様がキスをしたら……」と言った母親の気持ちもわかる。訪問者は若者に顔を近づける。かすかに石鹼せっけんのようなにおいがした。毎日、母親が病院に通ってきて、息子の顔を石鹼を含んだタオルで拭ぬぐい、髭をそるのだろう。

訪問者は若者の鼻に手をかざした。かすかに鼻息があたる。鼻をふさいだら、どうなってしまうのだろうかとふと考える。もちろん、死んでしまうはずだ。

………

母親がもどってくる前に、帰ってしまおう。引き止められても困るから。

静かに廊下に出ると、すぐ近くに階段があつた。階段を急いで駆け下り、正面玄関へ向かっている時、二階のほうから甲高い女かんだかの悲鳴が聞こえた。

………

2

ビュンと空気を切るような音がした。背中に鋭い視線が突き刺さるような気がした。

背筋に生じた寒けがあつという間に全身に広がる。

午後八時三十分。コンビニエンスストアの明かりが駐車場まで延びていて、そこには白い一台の車がスポットライトを浴びたように浮かび上がっている。店の前、コンクリートの車止めに白いだぼだぼの服を着た茶髪の若者が二人、だらしなく座ってコーラを飲んでいる。

あの連中ではない。コンビニの店舗てんぽの中、雑誌売り場に若い男が一人、女が二人。彼らは雑誌に熱中しており、こつちに注意を払っていない。

気のせいかな。

彼女は軽く頭を振って、前方に注意を払った。このところ、車から声をかけられたり、自転車でひったくられたりする事件が起きているので、「不審者に注意」の看板が道のところどころに立っている。

彼女の借りているマンションまであと三百メートルほどだ。彼女は足を速めた。今日は職場の同僚と食事をしていたので、いつもより少し遅くなってしまった。たまたま車が通りかかるだけで、人影はなかった。ゆるやかな坂を登りきり、道がやや下り坂に入ると、前方に彼女のマンションが見える。それまで感じていた不安が消えた時だった。ハンドバッグの中でマナーモードにしていた携帯電話が唸りを発した。

立ち止まって、携帯電話を取り出した。

職場の同僚からのメールだった。「今日は楽しかった。あの件、よろしくね」

あの件とは、同僚の恋愛に関する相談だった。わたしはいつも相談されるほう。そんなに頼りがいがあるのだろうか。そんなの嘘。本当のわたしは気が小さくて、何もできないタイプなのに。

でも、嫌われるよりいいか。ふつと笑い、不安を一瞬忘れた時だった。

背後から車のまわる音がしたのだ。風を切る音。

彼女が慌ててふり返った時、目の前に黒い影があった。「不審者に注意」の看板の文字が彼女の脳裏に閃いた。

「先生、しばらくですね」